



## 西アジアにおける都市化過程の研究

著者	常木 晃
発行年	2010
その他のタイトル	A Study on the Urbanization in West Asia
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/107654">http://hdl.handle.net/2241/107654</a>

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目：特定領域研究

研究期間：2005 ～ 2009

課題番号：17063001

研究課題名（和文） 西アジアにおける都市化過程の研究

研究課題名（英文） A Study on the Urbanization in West Asia

研究代表者

常木 晃 (TSUNEKI AKIRA)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授

研究者番号：70192648

研究成果の概要（和文）：

西アジアの都市化過程を具体的に追究するために、乾燥した内陸地域（ラッカ地域）と湿潤な地中海地域（イドリブ地域）という異なる自然環境の中でそれぞれ集落遺跡の発掘調査を行ない、社会の複雑化と部族社会の形成を考察するための様々な資料を得た。これに基づき新石器時代から青銅器時代へと至る歴史過程を検討し、それぞれの地域での都市化が部族社会の発達と密接にかかわっていた見通しを得た。また、楔形粘土板文書などに現れるアラム人、アムル人などの文献学的・言語学的研究を進め、セム語起源問題などについての研究を深化させた。

研究成果の概要（英文）：

We undertook archaeological excavations in a dry inland area (Al-Raqqa) and a humid Mediterranean area (Idlib) in Syria. The purpose of these excavations was to study the development of urbanization in each area. Based on the material obtained from the excavations, we reconstructed the two regions history from the Neolithic to the Bronze Age. The urbanization process may be connected with the development of tribal societies in each area. We also carried out linguistic analysis of the old Amorite and Aramaic names and Semitic urheimat on the clay tablets.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2005 年度	6,100,000	0	6,100,000
2006 年度	6,500,000	0	6,500,000
2007 年度	7,400,000	0	7,400,000
2008 年度	7,400,000	0	7,400,000
2009 年度	4,800,000	0	4,800,000
総 計	32,200,000	0	32,200,000

研究分野：西アジア考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：西アジア・都市化・部族社会・農耕社会・遊牧民・ビシュリ山系・メソポタミア・セトゥルメント

## 1. 研究開始当初の背景

都市の起源として欧米の学界で広く認められてきたのは、紀元前 3,500 年ごろのメソポタミア・ウルク期の都市遺跡群である。都

市の出現は人間社会のあり方を根本的に変え、これ以降人類の歴史は都市を中心に回っていくことになる。現在でも都市は政治・経済・文化の発信基地となっており、世界の中

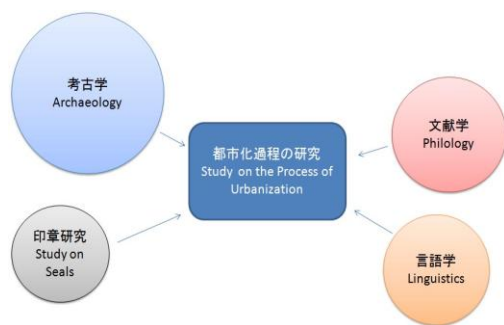
心は都市にあるといっても過言ではない。それではなぜ都市が歴史上に登場してきたのだろうか。この人類史の一大画期をめぐって、これまでも様々な仮説が提示され議論されてきた。環境変化や資源の偏在、戦争、交易など様々な要因が取り上げられてきたが、いまだ十分な回答が得られていない現状がある。私たちは、その大きな原因は、西アジアにおける都市の発生を農耕社会の発展という視点からしか捉えてこなかったことにあるのではないかと考え、本計画研究を企画した。

## 2. 研究の目的

西アジアにおける都市形成の研究を多角化させるために、特に部族社会というネットワークの形成という視点から、この問題を再考する。現代のアラブ社会を見ても、二律背反的な世界が実は1つの社会を形成し、歴史を動かしていることが分かる。都市と砂漠という、全く異なる環境に生きる都市民と遊牧民が、様々な部族社会的ネットワークで結節され、互いに離反集合を繰り返しながら統合的な社会を形成している。本研究では、都市形成に当たって後の遊牧社会に代表される部族社会が果たした役割を、考古学的、文献学的、言語学的資料を抽出しながら明らかにしていくことをめざした。

## 3. 研究の方法

都市化過程を研究していくために、以下のような多分野からのアプローチを試みた。



考古学班はシリアの2か所の地域において、特に都市的な集落の形成と部族社会とのかかわりに焦点を当てて考古学的調査を実施した。第1の地域は本特定領域全体の調査地でもあるビシュリ地域である。中でも特にユーフラテス河流域のテル・ガーネム・アル・アリ発掘調査とその周辺での民族考古学的調査を通じて、乾燥した平原地域での遊牧社会の起源と部族社会の形成の解明を目指した。第2の地域はビシュリ地域とは対照的な、地中海性気候に属する北西シリアの

イドリブ地域である。特に、水が豊富で豊かな植生環境に恵まれた小宇宙ともいえるエル・ルージュ盆地において、テル・エル・ケルク遺跡の発掘調査を行い、都市的集落の起源とその発展、部族社会の発達、そしてそこに展開した交易ネットワークの解明を目指した。第1の地域では主に青銅器時代を、第2の地域では新石器時代～青銅器時代を調査対象にし、都市の発達を時間軸でも捉えることを念頭に、両地域の比較検討を実施してきた。

文献・言語班は、他の計画研究班とも協力しながら、楔形粘土板文書に現れる紀元前3～2千年紀のアムル人、アラム人などに関する情報の追跡、言語学的に見たセム語の起源と比較研究などについて、研究を進めた。

## 4. 研究成果

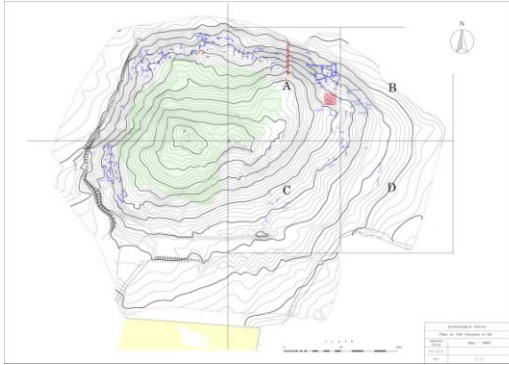
### (1) ビシュリ地域の紀元前3千年紀の農耕村落の解明

ビシュリ地域に所在する前期青銅器時代の農耕村落の一つであるテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の発掘調査に参加し、ビシュリ地域において遊牧社会が登場した紀元前3千年紀ごろのユーフラテス河中流域の農耕村落実態解明の一端を担った。

① ガーネム・アル・アリ遺跡の発掘調査は、本特定領域研究で実施した現地調査を形成すプロジェクト群の中核であり、領域代表者を中心としたこのプロジェクトに、本計画研究の研究代表者と研究協力者が参加し、実務を分担した。調査の結果、ガーネム・アル・アリ遺跡は前期青銅器時代の始まりとほぼ同時に居住が始まり、その後断続的に居住されたこと、前期青銅器時代VIA期に居住が廃絶されたこと、その後中期青銅器時代に一次的な居住と墓の造営があるものの、その規模や繁栄は前期青銅器時代とは比較にならない小規模なものであったこと、などが解明された。ガーネム・アル・アリに代表されるようなビシュリ地域のユーフラテス河沿いのテル型集落遺跡は、ほぼ同様な推移をたどったものであることが表面踏査から推察されている。この現象は、ガーネム・アル・アリに隣接した河岸段丘上の古墳・シャフト墓・ケルン墓からなる墓地群、ビシュリ山中の遊牧民の残したケルン墓群の造営時期とは表裏一体をなしており、各成果を比較研究することによって、ビシュリ地域でなぜ、どのように遊牧民が発生し発展したかを探索するための重要な基礎データとなった。

② テル・ガーネム・アル・アリ遺跡において、テルの地表面から観察される建築遺構、特に壁の痕跡をトータル・ステーションシス

テムを用いて測量調査し、前期青銅器時代 III 期～VIA 期の集落の痕跡を記録していった。その結果、同時代の集落には計画的な街路が存在していなかった可能性を指摘できた。当時のガーネム・アリ村の住居配置は拡散的で、集約的な集落構造をとっていなかったものと思われた。



ガーネム・アル・アリ遺跡の地形図



ガーネム・アル・アリのA-D区建物群

## (2) 墓地の形成過程について民族考古学的手法からの提言

ガーネム・アル・アリ村において特に墓地に関する民族考古学的調査を実施し、墓地という物質文化と人間集団がどのように関わって墓地が形成されていくのかについて、提言を行った。これは、先史時代において、部族集団に代表される人間集団の違いがどのように物質文化に反映されているのかについてヒントを得るための、民族考古学的試みである。その結果、以下のような提言をおこなうことができた。

①一般的に、墓地の空間配置と人間集団の間には強い相関が認められた。ガーネム・ア

ル・アリ村の例では、墓地内のアイーラ集団ごとの空間配置は、同集団間の居住配置とよく相関している。また、人間集団規模は、同一墓地内のアイーラ集団間の混合度合いに影響を与える。②墓地内の墓および墓石の型式は、一般に人間集団の違いを反映しない。墓の形式の違いは主に個人の社会経済的地位や政治的地位の差を反映し、墓石の違いは年代や経済的地位、単なる好みによる。③墓地の形成は、立地により異なる。丘に墓地が作られる時は中央から周辺に墓地が広がり、スロープや平地に墓地が作られる時は、一方の端から他方に向かって広がっていく。

## (3) 西アジア先史時代社会の複雑化と、そこに部族社会ともいえる血縁的な人間集団の存在があった可能性を提示

①シリア北西部イドリブ県のエル・ルージュ盆地に所在する巨大な新石器時代集落であるテル・エル・ケルク遺跡の発掘調査を実施し、その研究成果から、紀元前 8600 年～5800 年にかけての集落の形成、変遷、衰退過程を明らかにした。当地での集落の発生から都市的な巨大集落形成まで、どのように社会が複雑化していったのかについて、考古学的な多くの資料を得て考察を加えた。特に紀元前 6500 年ごろの集落の様相の解明に力を注ぎ、社会の複雑化が相当進行していたことや、社会の運営に儀礼活動が重要な役割を果たしていたことなどが判明した。また、居住域に隣接して墓地が発見され、当時の社会の葬送習慣や他界観などについての多くの情報をもたらした。

②本遺跡の発掘調査自体は 1997 年から進行中だが、特定領域研究の助成を得た 2005 年からは大規模な調査が可能となり、特にルージュ Ic 期から IIc 期半ばまでの大型集落を営んだ社会は単に規模が大きっただけでなく、高度に複雑化した社会であることが判明してきた。そのうち研究代表者が特に注目してきたのが、物資管理に用いられた印章・印影などのステイショナリーである。印章の分類と他の遺跡から出土している印章類との比較研究から、封泥システムからみるとケルクの社会には少なくとも 5 つ以上の物資管理グループが存在したと推定された。そしてこれらは、新石器時代に人間集団が分化していた可能性を示唆した。また、その社会が交易ネットワークにより同時代の広範な地域と密接に結ばれていたことが明らかとなった。

## (4) 文献学的、言語学的研究に基づいて、

セム語の起源、セム語族の原郷問題と、セム系部族社会の形成について提言

歴史学、言語学分野では、主に歴史的な文献史料を基に、都市社会の形成過程にセム系部族社会がどう関わってきたのかについて考察を進めた。特に文献に現れるセム系言語集団の系譜とビシュリ山系との関わりについての基本的事項を網羅的に整理し、セム諸語、セムに関わる古代文献の一覧を作成し、その一部の内容などを明確にすることができた。また、セム祖語として再建される語彙を抽出、検討した結果、セム語の原郷は農耕牧畜が行われていた地域内にあることを明らかにした。また、楔形文書の中にみられるアムル系、アラム系の名前を抽出することで、紀元前3千年紀から2千年紀にかけて遊牧系の出自を持つアムル人、アラム人が歴史に登場してくる状況を明らかにした。

(5) 特定領域全体への本計画研究班の寄与

上記した主たる研究成果のうち(1)は、本特定領域研究で実施した現地調査を形成するプロジェクト群の中核であるガーネム・アル・アリ遺跡が前期青銅器時代の始まりから同 VIA 期までの間断統的に居住されたのちに廃絶されたことを明らかにした。前述したように、ビシュリ地域のユーフラテス河沿いのテル型集落遺跡はほぼ同様な推移をたどっており、この推移と他の計画研究班の研究成果を照らし合わせることで、ビシュリ地域の紀元前 3~2 千年紀の人間集団の動きが判明した。それは、まさにセム系部族社会の形成そのものと密接にかかわっている。

(2) は、セム系部族社会人の末裔でもある現在のガーネム・アル・アリ村の住民たちの、アイーラレベルでの人間集団の関係を、物質文化で表そうとした研究であり、この民族考古学的な研究成果は、物質文化でしか捉えようのない先史時代のセム系部族社会の人間集団関係を考古学的にどのように把握するかを考えるときの重要なヒントを提供するものと考えている。

(3) は、セム系部族社会の形成研究とは直接的には関連しないが、西アジアにおいて都市的な集落が、いつ、どこで、どのように、そしてなぜ形成されるのかを考えるための重要な資料を提供するものである。この研究成果は、従来考えられていたような紀元前 4 千年紀後半の南メソポタミアをはるかにさかのぼって、原都市とも言えるような巨大な集落がシリア北西部に存在していることを示唆しており、その出現を説明するためには、これまでの都市形成プロセスとは全く異なる

る原理が必要になる。

(4) は、本計画研究の中では最も直接的にセム系部族社会の出現とその後の展開を扱っており、まさに特定領域全体のセム系部族社会の形成の研究へ、正面から寄与する。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 35 件)

① Tsuneki, A. “A newly discovered Neolithic cemetery at Tell el-Kerkh, northwest Syria”, in Matthiae P., Pinnock, F., Nigro, L., and Marchetti, N. (eds.) *Proceedings of the 6<sup>th</sup> International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, Volume 2*, : pp.697-713, Harrasowitz Verlag, Wiesbaden. 2010 年 4 月 (査読無)

② 常木 晃 「頭蓋骨埋葬の二態」『歴史人類』38 : 87-113 筑波大学大学院人文社会科学部歴史・人類学専攻 2010 年 3 月 (査読有)

③ Tsuneki, A. “Ethno-archaeological research on the modern cemeteries of Ghanem al-Ali village”. Onuma, K. (ed.) *Formation of Tribal Communities, Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria. Al-Rāfidān Special Issue* pp.79-90, 2010 年 3 月 (査読無)

④ Tsuneki, A. and Hydar, J. “Tell el-Kerkh 2007”, *Chronique Archéologique en Syrie*: volume 3, 2008, pp.75-85. Direction Général des Antiquités et des Musées, 2009 年 9 月 (査読無)

⑤ 常木 晃 「ギョベックリ遺跡と部族社会」『Newsletter セム系部族社会の形成』13 : 6-9. 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究 2009 年 1 月 (査読無)

⑥ Yamada, S.: “History and Ideology in the Inscriptions of Shalmaneser III: An Analysis of Stylistic Changes in the Assyrian Annals,” in I. Eph'al – N. Na'aman (eds.), *Royal Assyrian Inscriptions: History, Historiography and Ideology. A Conference in Honour of Hayim Tadmor on the Occasion of His Eightieth Birthday*. pp. vii-xxx. 2009 (査読無)

⑦ Ikeda, J. Relational Units in Cuneiform Writing: Two Cases of Comparative Graphemics, *Acta Sumerologica* 23, 2009 (査読有)

⑧ Ishida, K. Chapter 8.1. Seals and seal

Impressions, in Iwasaki T. et al. ed. *TELL MASTUMA: An Iron Age Settlement in Northwest Syria*. Ancient Orient Museum, Tokyo, 437-458 頁、2009 (査読無)

⑨ Tsuneki, A. “6. A short history of Ganam al-Ali village” in Ohnuma, K. and al-Shbib, S. (eds.) *Archaeological survey in the Bishri region south of Raqqa – report of the first working season, Al-Rāfidān* 29, pp.184-190. 2008 年 3 月 (査読無)

⑩ 三宅 裕 「古代西アジアにおける銅冶金術の歴史」『*Journal of MMIJ (資源・素材学会誌)*』124 号 554-561 頁。2008 年 9 月 (査読有)

⑪ Yamada, S. “Qurdi-Assur-lamur: His Letters and Carrier,” in M. Cogan and D. Kahn (eds.), *Treasures on Camels’ Humps: Historical and Literary Studies from the Ancient Near East Presented to Israel Eph’al*, Jerusalem, pp. 296-311. 2008 (査読無)

⑫ Yamada, S. “Preliminary Report on the Old Babylonian Texts from the Excavation of Tell Taban in the 2005 and 2006 Seasons: The Middle Euphrates and Habur Areas in the Post-Hammurabi Period,” *Al-Rāfidān* 29, pp. 47-62. 2008 (査読無)

⑬ 池田潤 「GIS を用いたアマルナ書簡の言語地理学的研究(1): 動詞語尾 -(n)na の地理的分布」『*一般言語学論叢*』第 11 号: 139-156, 2008

⑭ 石田恵子 「テル・ルメイラ出土の家形模型について」『*古代オリエント博物館紀要*』第 27 巻 1-22 頁 2008 年 (査読有)

⑮ Tsuneki, A., Mohsen, Z. and Ohnuma, K. “Proto-Neolithic caves in the Bolaghi Valley, south Iran”, *Iran* 44, pp.1-22. 2007 年 12 月 (査読有)

⑯ Tsuneki, A. “Development of the clay sealing system in the Neolithic period in West Asia – from an archaeological study of Tell el-Kerkh”, 大沼勝彦編『*文部省科学研究費補助金特定領域研究セム系部族社会の形成平成 18 年度研究報告*』 pp.36 – 43. 2007 年 7 月 (査読無)

⑰ Miyake, Y. *Salat Cami Yanı: Dicle Havzası’nda Çanak Çömlekli Neolitik Döneme ait Yeni Bir Yerleşme. Türkiye’de Neolitik Dönem: Yeni Kazılar, Yeni Bulgular.* [Arkeoloji ve Sanat Yayınları] pp. 37-46 2007 年 10 月 (査読無)

⑱ 山田重郎 : 「列王記とメソポタミアの歴史文書」(『*CISMOR ユダヤ学会誌*—第 2 号(2006 年)』同志社大学—神教学際研究センター, 6-15 頁、2007 年 3 月 (査読無))

⑲ Ikeda, J. *Semitic Urheimat: A Linguistic Survey* 『*文部科学省科学研究費補助金特定領域研究池田潤「セム系部族社会の形成」平成18年度研究報告*』国士舘大学イラク古代文化研究所, 2007, 44-51.

⑳ 常木 晃 「考古学フィールドとしてのジャバル・ビシュリ」『*Newsletter セム系部族社会の形成*』No. 3 1~8 頁 2006 年 8 月 (査読無)

㉑ Tsuneki, A., Arimura, M., Maeda, O., Tanno, K., and Anezaki, T. “The early PPNB in the north Levant: A new perspective from Tell Ain el-Kerkh, northwest Syria”, *Paléorient* 32/1: 47-71, 2006 年 12 月 (査読有)

㉒ Yamada, S. “The City of Togarma in Neo-Assyrian Sources” *Altorientalische Forschungen* 33: 223-236, 2006 (査読有)

㉓ Shigeo WAKITA, Keiko ISHIDA and Hisahiko WADA, “A Burial in the Middle Euphrates, in Syria Grave D-No.21: An Early Bronze Age grave in Area D in Rumeilah”, *Bulletin of the Ancient Orient Museum* Vol.XXV, pp.1-16, 2006. (査読有)

〔学会発表〕(計 20 件)

① Tsuneki, A. “Proto-Neolithic caves in the Bolaghi valley, southern Zagros”, 7<sup>th</sup> *International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, Programme & Abstract Handbook*, p.101, The British Museum & University College of London, April 12-16, 2010, London

② 常木 晃 「西アジア先史考古学の課題—イラン、シリアの調査から」第 22 回名古屋大学年代測定総合研究センターシンポジウム特別講演 2010 年 1 月 14 日、名古屋

③ Tsuneki, A. “Ethno-archaeological research on the modern cemeteries of Ghanem al-Ali village”. *Formation of Tribal Communities, Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria*. November 21-23, 2009, Tokyo

④ Tsuneki, A. “Symposium aim: the significance of research on the emergence of pottery in West



Asia”, *The Emergence of Pottery in West Asia: The Search for the Origin of Pyrotechnology*, University of Tsukuba. October 29- November 1, 2009, Tsukuba.

⑤ Yamada, S. “Amorite Societies along the Lower Habur according to the Tell Taban Tablets” *Formation of Tribal Communities, Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria*. November 21-23, 2009, Tokyo

⑥ 常木 晃 「西アジア新石器時代の墓地と火葬」日本考古学協会第 75 回総会 早稲田大学 2009 年 5 月 31 日 東京

⑦ Tsuneki, A. “The archaeology of death in the Late Neolithic: a view from Tell el-Kerkh”, *Interpreting the Late Neolithic of Upper Mesopotamia*, Leiden University, March 26- 28, 2009, Leiden

⑧ 常木 晃 「西アジアにおける墓地の成立」日本西アジア考古学会第 13 回総会・大会、慶應大学 2008 年 6 月 15 日、東京

⑨ Tsuneki, A. “A newly discovered Neolithic cemetery at Tell el-Kerkh, northwest Syria”, 6<sup>th</sup> *International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*, University of Rome, May 5-9, 2008, Rome

⑩ Ikeda, J. “Early Japanese and Early Akkadian Writing Systems: A Contrastive Survey of „Kunogenesis.” *International Symposium on the Origins of Early Writing Systems* October 5-7, 2007; Peking University, Beijing

⑪ 常木 晃 「研究計画 西アジアにおける都市化過程の研究」文部省科学研究費補助金特定領域研究セム系部族社会の形成第 3 回シンポジウム平成 17～18 年度の研究成果 2007 年 3 月 24-25 日、東京

⑫ 常木 晃 「西アジア新石器時代における封泥システムの発達—テル・エル・ケルク遺跡の調査から—」日本考古学協会第 72 回総会 東京学芸大学 2006 年 5 月 28 日 東京

⑬ Tsuneki, A. “A Large and Complex Neolithic Settlement at Tell el-Kerkh, Syria”, 5<sup>th</sup> *International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*, University of Madlid, 2006 年 4 月 4 日, Madlid

〔図書〕(計 5 件)

① Tsuneki, A. “Chapater 2 Tell -type settlements around Tell Mastuma”, “Chapter 3

Stratigraphy: 3.3. Neolithic and Early Bronze Age layers in Square 15Gc” in Iwasaki, T., Wakita, S., Ishida, K. and Wada, H. (eds.) *Tell Mastuma: An Iron Age Settlement in Northwest Syria*, Memoirs of Ancient Orient Museum Vol. III, pp.11-54, pp.69-88. Ancient Orient Museum, Tokyo, 2009 年 8 月 総頁 572P

② 岩崎卓也・常木 晃 「総論：国家形成の考古学」『現代の考古学 7 国家形成の考古学』 pp.1-32. 朝倉書店 共編著 2008 年 11 月 総頁 204P

③ Tsuneki, A. and Zeidi, M. (eds.) *Tang-e Bolaghi: The Iran-Japan Archaeological Project for the Sivand Dam Salvage Area*, Al-Shark 3, University of Tsukuba, Studies for West Asian Archaeology, Iranian Center for Archaeological Research and Department of Archaeology, University of Tsukuba, 2008 年 3 月 総頁 261P

④ Tsuneki, A., Hydar, J., Odaka, T. and Hasegawa, A. *A Decade of Excavations at Tell el-Kerkh, 1997-2006*, Department of Archaeology, University of Tsukuba, 2007 年 6 月 総頁 26P

〔その他〕

ホームページ等

<http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryuiki/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

常木 晃 (TSUNEKI AKIRA)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授  
研究者番号：70192648

### (2) 研究分担者

三宅 裕 (MIYAKE YUTAKA)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授  
研究者番号：60261749

山田 重郎 (YAMADA SHIGEO)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授  
研究者番号：30323223

池田 潤 (IKEDA JUN)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授  
研究者番号：60288850

石田 恵子 (ISHIDA KEIKO)

(財) 古代オリエント博物館・研究部長  
研究者番号：30132757